

# 『フランス革命史』とロベスピエール

P.-J.-B.ピュシエ

永井 典克

「1831年から、フランスには共和主義のカトリックの一派が存在する。ピュシエ氏はその創立者である。」とネルヴァルは1850年「赤い予言者たち」のなかで、二月革命後、憲法制定議会の議長を務めた時の人ピュシエの紹介を始めている。P.-J.-B.ピュシエ(1796-1865)はネルヴァルによれば幻視者の系譜の一人に属し、最初サン=シモン主義者であったが、独自の「教義」を1830年代に出版された『フランス革命史』の「序文」において展開していた<sup>3</sup>。ネルヴァルの記事において問題になっているのは、この20年も前の「教義」なのだが、これはカトリックの思想と革命の思想の融合を試みたものだった。

フランス革命は近代文明の最終にして最も進歩した形態である。そして近代文明とは全て福音書から起こったものである。出来事だけではなく、その出来事を引き起こす思想を研究しながら歴史をみれば、特に我が国の歴史をみれば、このことに疑いをはさむことはできない。もしイエスの教義を、フランスの旗と法典に書き込まれた革命の原理と対比してみれば、ますます疑うことができなくなるであろう<sup>4</sup>。

ネルヴァルは、国民公会の原理と、教会の原理との間に実際類似を認められる<sup>5</sup>ので、このピュシエの「教義」に魅力を見いだすことができるとしている

1 « Les prophètes rouges », *Le diable rouge*, Aubert et Cie, 1849, p. 53

2 *Histoire parlementaire de la Révolution française*, Paulin, Paris, 1833-1838

3 « Les prophètes rouges », p. 53

ピュシエの「予言者」としての性格は、『フランス革命史』序文において現れている。彼にとって問題となっているのは、単に過去の出来事ではなく、「継続している過去、我々の未来を作りだす過去(*Histoire*, t. 1, p. 4)」であり「ながいこと教えられてきた原理は、完成に近づいている(*Ibid.*)」のだ。

これは、ロベスピエールの至高存在の存在と魂の不滅性を認めた1794年5月7日「宗教とモラルと共和国の原理との関係について」の報告の中で、「物理的秩序は全て変わった。モラルと政治の秩序において全てが変わらなくてはいけない。革命の半分はなされた。残りの半分がなされなくてはならないのだ(*Ibid.*, t. 32, p. 354)」という部分に影響されている。

4 *Ibid.*, t. 1, p. 1

5 « Les prophètes rouges », p. 53

る。むしろ「特異な狂信の根底」にあり、「当時のヴォルテール流の自由主義者たちを驚かしたことは、ビュシェ氏の一派がロベスピエールをイエス・キリストと同じように崇拜したこと<sup>6)</sup>であった。実際、フランス革命を福音書から起きたものだとするビュシェにしてみれば、革命の立役者であるロベスピエールの言動はキリスト教に引きつけて解釈されなくてははいけなかったのだ。

まず、ビュシェはロベスピエールとサン＝ジュストを「ほとんどモラリストのように扱って」いた。ビュシェのいうモラリストとは「善と悪の区別をつける最終段階に到達し」、「彼らが権威を認め、その必要性を訴えているモラルのみなもとに気がついて<sup>7)</sup>いる人のことだが、ロベスピエールも市民社会の唯一の土台がモラルである<sup>8)</sup>としていたのである。モラルとは悪徳(vice)と徳(vertu)を見分け、徳に向かわせる能力であり、徳が国とその法への愛、平等への愛であり、個々人の利益より社会の利益のほうを、つまりは義務を重んずることに他ならない<sup>9)</sup>とするロベスピエールをモラリスト扱いしてもおかしくない、とビュシェは主張する。

しかし、彼を完全なモラリストと言い切るわけにはいかなかった。ビュシェにとって、もう一つの条件が必要だったからである。「モラルのみなもと」の問題だ。

民主主義のうちにしか存在せず、これなくして民主主義も存在しないとい

---

6 *Ibid.*

7 *Histoire*, t. 31, p. v-vi

ロベスピエールをモラリスト扱いすることに関して、このことに驚く人は「彼らが無神論的えせ哲学の敵であることを知らないのだろうか」とビュシェは述べている。ビュシェにとって権利よりも義務のほうの方が前に来ることを理解しないエゴイスト、哲学者たち非難の対象であり、ロベスピエールも1794年5月7日の報告のなかで、百科全書家達を非難している\*)。この点において、ロベスピエールとビュシェの見解は一致していた。

彼らは時に専制政治に反対したが、専制君主から年金を受けていた。彼らは宮廷に反対する本を書いたが王に献辞をし宮廷人のため演説を書き宮廷の女性のためマドリガルを書いたのだ(*Ibid.*, t. 32, p. 569)。

\*)ジャン＝ジャック・ルソー一人はロベスピエールの攻撃を免れている。

私が話題にしている時代において、自らが書いたものと、その哲学によって際立った人々のうちただ一人だけが魂の気高さや人格の偉大さによって人類全体の師の任に相応しかった。彼は誠実さを持ちつつ独裁を攻撃し、熱心に神(Divinie)についての話をしたのだ(*Ibid.*)。

市民の宗教とは、市民に自らの義務をなすことを愛させるものであると告げる【社会契約論】(chap. VIII « De la religion civile », Livre IV, *Du contrat social*, J.-J. Rousseau)はロベスピエールにとって「福音書」であった(*Histoire*, t. 33, Préface, p. x)。

8 « Rapport du 7 mai 1794 », *Ibid.*, t. 32, p. 357

9 « Rapport du 5 fevrier 1794 », *Ibid.*, t. 31, p. 271-272

う徳、この徳を支えるものとして、ロベスピエールは至高存在をあげている。信仰が弱き人間を支えてくれるのだ、と彼は言う。

モラルを永遠にして神聖なる基盤に結び付けよう。宗教に似た敬意を、人が人に対して抱くように、自らの義務について深い感情を、人が抱くようにしよう。それこそが、社会の幸福の唯一の保証となるものなのだ<sup>10</sup>。

この信仰は自明のものではない。彼は、同時に次のような条項を含む法案を提出していた。

第一条、フランス人民は至高存在の存在と魂の不滅を認める。

第二条、フランス人民は至高存在の礼拝は、人間としての義務の実行であると認める<sup>11</sup>。

至高存在は、義務を人々に愛させるため、人間が能動的に認め、徳と結び付ける存在である。このルソーの弟子にとって「モラル」は信仰により補強されるが、その信仰は人間が規定するものなのだ。

それにたいして、ピュシエはモラルの起源を以下のように考察している<sup>12</sup>。モラルは至高のもの(souveraine)として、完全なる強制力を持つものとして与えられなければならない。何故ならば肉体を従わせるだけでは不十分であって、精神を従わせ、良心を治める必要があるからだ。えせ哲学者達がいうようにモラルが自然のものであるとか、人間の便宜のために人間により作られたのであっては、モラルは十分な強制力を持ちえないのだ。従って、モラルは「神の贈り物」でしかあり得ない、とピュシエは続ける。彼にとって「善」と「悪」とはキリスト教により区別されるものであり、モラリストはキリスト教徒でしかありえなかった。

モラルという言葉を政治の場において使う人間は、「手段としてモラルという言葉を使っているのではないかと常に疑われる。そうでないかも知れない。しかし、疑われるものだ<sup>13</sup>」と、ピュシエは補足する。モラルという言葉を口にしていても、それを実際に信じているかは分からないからだ。

---

<sup>10</sup> *Ibid.*, t. 32, p. 375

<sup>11</sup> *Ibid.*, p. 379

【社会契約論】によれば「国家にとって、市民それぞれが義務を愛すようにしむける宗教を持つことは重要であり」、「純粹に市民の信仰が存在し、支配者(souverain)がその条項を規定することができた(« De la religion civile »)。」

<sup>12</sup> *Ibid.*, t. 31, p. vi-xv

<sup>13</sup> *Ibid.*

以上のような理由から、ビュシェのロベスピエール観は揺らぎをみせている。福音書の延長である革命において、「神の贈り物」であるモラルという言葉を出すロベスピエールは、えせ哲学者の無神論に終わりを告げさせた人物として、高く評価され、擁護される。しかし、ロベスピエールのモラルはビュシェのモラルとは異なるものでしかない。結局のところ彼の「福音書」は『社会契約論』であり、国民議会であったからだ。キリスト教のモラルに導かれない者は、無力であり、善をなすことができない<sup>14</sup>。その点において、ビュシェはロベスピエールを強く非難しなければならなかった。

『フランス革命史』の中のロベスピエールは形式的には「モラリスト」でありながら、定義の上から「モラリスト」たりえず、結局は 18 世紀の影響を逃れきることができなかった人間として描かれている。

---

14 *Ibid.*, t. 33, p. x